

第40回全国豊かな海づくり大会 ～食材王国みやぎ大会～

「よみがえる 豊かな海を 輝く未来へ」をテーマに
令和3年10月3日に宮城県で開催

1 開催の意義

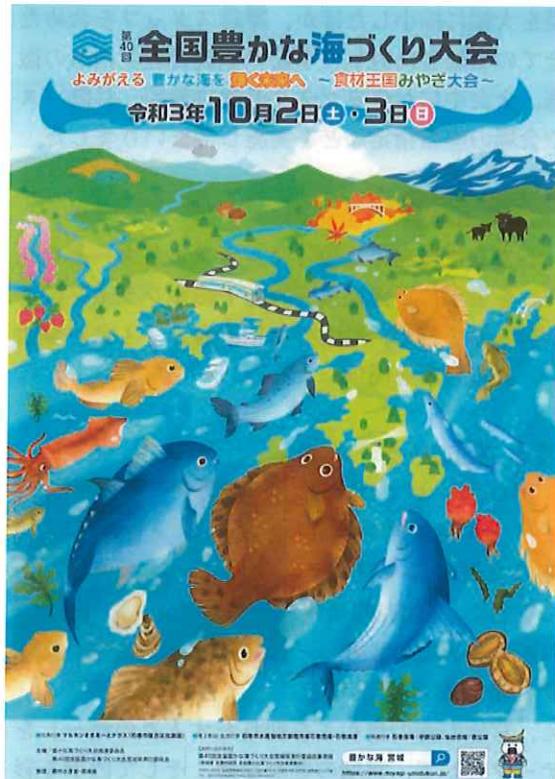
新型コロナウイルス感染症の影響により、一年延期された「第40回全国豊かな海づくり大会～食材王国みやぎ大会～」が、天皇皇后両陛下のオンラインによる御臨席のもと、令和3年10月3日（日）に宮城県で開催されました。

宮城県は、東北地方の南東部に位置し、東は太平洋に面し、西部は奥羽山脈、北東部には北上山地、南部には阿武隈山地が連なり四季折々の姿を見せ、中央部の仙台平野には北上川、阿武隈川といった大きな河川が流れ、肥沃な大地は日本有数の穀倉地帯となっています。

また、宮城の海は、世界有数の三陸沖漁場の南方に広がり、沖合には季節ごとに行き交う黒潮、親潮が豊富な海の幸を運んできます。水産業は、豊かな食と生活を実現しながら、固有の風土や文化も育んでおり、震災以前は、全国第2位を誇る漁業生産量を背景に、全国各地に良質な水産物を安定的に供給する役割を担ってきました。加えて、水産業は漁獲、水揚げ、流通及び加工の各段階で多種多様な産業を構築しており、本県経済、とりわけ沿岸地域の振興に重要な役割を果たしてきました。



大会キャラクター「むすび丸」



大会公式ポスター

しかしながら、平成23年3月11日に東日本大震災が発生し、県内に142ある漁港の全てが被災したほか、本県で営まれている様々な漁業、沿岸部に集積していた流通・加工に関する産業は壊滅的な被害を受けました。これにより、漁業生産量は震災前に比べ半減するとともに、水産加工関連事業所も激減しました。

そこで宮城県では、平成23年度から令和2年度までの10年間で復興を成し遂げるための道筋を示す「宮城県震災復興計画」や、本県水産業の復旧・復興に向けた取組の継続・強化と新たな水産業の創造を視点に「水産業の振興に関する基本的な計画」を策定するとともに、国や全国の民間

事業者等から多くの支援を受けながら、県民一体となって早期の復旧・復興に取り組んでまいりました。

こうした中、本県において「全国豊かな海づくり大会」を開催できたことは、東日本大震災で全国の皆様からいただいた数多くの御支援に対する感謝の想いと復興が進んだ本県水産業の姿を全国に伝える絶好の機会となりました。

なお、大会を通して、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、招待者数を1,000名以下にする（当初計画3,000名）など、開催規模を大幅に縮小したほか、運営スタッフを含めた全ての参加者に対して事前の体調管理と検温の徹底、大会中におけるマスクの常時着用、移動バスや会場の座席指定などを実施してまいりました。

2 式典行事

石巻市複合文化施設「マルホンまきあーとテラス」を会場に、天皇皇后両陛下のオンラインによる御臨席を仰ぎ、県内外の招待者371名が参加し、式典行事を開催しました。

(1) プロローグ

プロローグでは、ナビゲーターに宮城県出身で女優の鈴木京香さんを迎えて、「創造的復興の海への新たな船出～東日本大震災を乗り越



プロローグの様子

え、宮城の海の豊かさを創りだす人々の輪～」をテーマとして、宮城の豊かな海、そして四季を彩る海の恵みと浜の伝統・文化を紹介した後、大震災を乗り越え、創造的復興の海を創りだしていく県民の想いと試み、国内外からの支援に対する感謝の気持ちを映像と音楽によりストーリー性を持たせて表現しました。

(2) 式典行事

開式に先立ち、東日本大震災の犠牲者に哀悼の意を表して、参加者全員で1分間の黙祷を捧げました。

大会旗入場では、地元石巻市のひばり幼稚園鼓隊の先導で宮城県水産高等学校旗手団が入場し、旗手団長から石川光次郎宮城県議会議長へ大会旗が手渡されました。



天皇皇后両陛下の御臨席

その後、寺沢春彦宮城県漁業協同組合代表理事組合長の開会のことばで式典の幕が開き、宮城県出身・在住でシンガーソングライターの熊谷育美さんの国家独唱、大島理森全国豊かな海づくり大会会長（衆議院議長）と村井嘉浩宮城県知事の主催者あいさつ、斎藤正美石巻市長の歓迎のことばが続きました。

天皇陛下からは、「この大会が、海や漁業への関心と理解を深め、豊かな海づくりを目指して更多の人々が協力していくための契機となることを願い、挨拶といたします。」との『おことば』をいただきました（全文は別掲）。



天皇陛下のおことば

功績団体と作品コンクール受賞者代表の表彰の後、最優秀作文の発表では、石巻市立蛇田小学校4年生の大森心結さんが「わたしの体は海でできている」を朗読し、大会記念放流稚魚等のご紹介では、石巻市立桜坂高等学校生徒の介添えにより、



最優秀作文の発表

大会記念放流稚魚等のご紹介

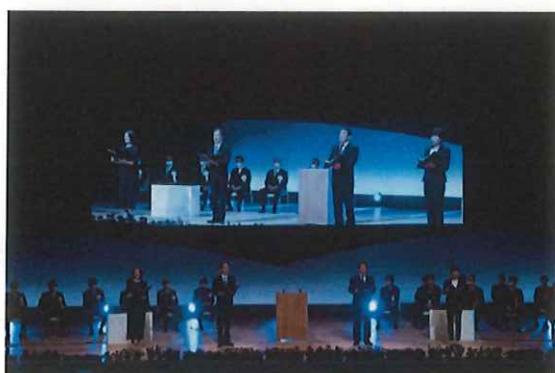
石森隼人さん、鈴木颯太さん、工藤忠司さん、千葉純一さんに、それぞれマガキ・ノリ・エゾアワビ・イワナをご紹介いただきました。

なお、稚魚等のご紹介で使用した容器は、「宮城伝統こけし」を活用して制作し、FSC認証の県産スギ材のお盆に乗せることで、海と森の繋がりを表現しました。



ご紹介用の容器

海づくりメッセージでは、11人の漁業者・水産加工業者・林業者の方々に映像を交えて登場していただき、震災から10年間の復興の歩みを踏まえた自らのチャレンジや、未来への決意をリレー形式で発表しました。



海づくりメッセージの発表

式典の締めくくりは、岸宏豊かな海づくり大会推進委員会会長（全国漁業協同組合連合会代表理事長）による大会決議が満場の拍手をもって採択され、大会旗を村井知事から次期開催県の齋藤元彦兵庫県知事に引き継ぎ、石川県議会議長の閉会のことばで閉式となりました。

(3) エピローグ



エピローグの様子

式典終了後、遠藤信哉宮城県副知事から、功績団体表彰受賞者と作品コンクール受賞者へ表彰状の授与が行われました。

その後、鈴木京香さんと熊谷育美さんが再度登壇し、お二人の震災当時の体験や復興への想い、未来への希望などが語られました。

エンディングは、熊谷育美さんが本大会のために制作したイメージソング「海よ」を披露し、宮城県仙台南高等学校音楽部合唱団のコーラス（映像出演）とともに、宮城県各地の情景や子ども達の笑顔、そして広く美しい宮城の海がスクリーンに映し出され、会場全体を感動の渦に包みながら幕を下ろしました。



イメージソング「海よ」

3 海上歓迎・放流行事

海上歓迎・放流行事会場の「石巻市水産物地方卸売市場石巻売場（石巻魚市場）」と「石巻漁港」では、366名の招待者の皆様をお招きし、各企業・団体様からの協賛品や県内市町村提供の特産品により、おもてなしを行いながら、式典行事の録画映像をご覧いただきました。

その後、式典行事に参加された招待者も合流し、合わせて737名の皆様に、選りすぐりの県産食材により製作した大会記念弁当『食材王国みやざまるごと御膳』をご賞味いただきました。



大会記念弁当「食材王国みやざまるごと御膳」

(1) 海上歓迎行事

式典行事同様に、天皇皇后両陛下のオンラインによる御臨席を仰ぎ、「雄勝町伊達の黒船太鼓保存会」（石巻市）による勇壮な歓迎太鼓演奏と、航空自衛隊第4航空団所属の第11飛行隊「ブルーインパルス」の祝賀飛行で海上歓迎行事の幕を開けました。

漁船パレードでは、水産県宮城が誇る漁業取締船の先導と漁業調査指導船の後従により、本県を代表する漁船7隻が、その特徴的な漁法と震災を

乗り越えたエピソードを交えながら招待者の皆様を歓迎しました。



天皇皇后両陛下の御臨席



歓迎演奏
「伊達の黒船太鼓」

祝賀飛行
「ブルーインパルス」



漁船パレードの様子

このほかにも、歓迎装飾として石巻魚市場前岸壁では宮城県沖合底びき網漁業協同組合の所属船が、石巻漁港（西港）では宮城県近海底曳網漁業協同組合の所属船が、大漁旗を掲げて皆様をお迎えしました。

（2）放流行事

統いて行われた稚魚の御放流では、宮城県で生産している種苗の中から選定された「ホシガレイ」と「ヒラメ」が、大島大会会長をはじめとした全招待者の皆様により放流されました。

メインの御放流台は、令和元年に開催された「第39回あきた大会」で使用されたものです。秋田杉の柱目材を用いた大変美しい作品で、東北の絆

として譲り受けました。



上段：御放流の様子

下段：ホシガレイ（左）とヒラメ

そして、誓いの言葉では、石巻市立寄磯小学校代表児童が「美しく豊かな海を復興への感謝の気持ちと一緒に守り、育てていきます。」と力強く宣言し、天皇陛下からの『おことば』をもって大会行事の全てが無事に終了しました。



御放流台全景



誓いの言葉

4 リモート会場等

コロナ禍での大会開催となったことで、式典行事等への招待者規模は縮小せざるを得なくなりましたが、一人でも多くの方に大会を肌で感じていただけるよう、仙台市内に特設の「リモート会場」を設営し、129名の招待者の皆様に中継映像をご覧いただくという形でご参加いただきました。

また、JR仙台駅構内においては、県産の水産物・林産物を取り揃えた販売会「仙台エキナカイベント」を開催しました。



リモート会場の様子



仙台エキナカイベントの様子

5 宮城大会の特色（開催に込めた想い）

開催に当たっては、震災から10年、そして

40回目の大会という二つの節目に当たり、強い決意を持って臨むとともに、水産業・林業をはじめとする各業界の団体や企業の皆様から多大なご協力をいただきました。

また、内陸も含めた全ての市町村との連携も図り、オール宮城として総力を挙げて取り組んできました。

大会テーマである「よみがえる 豊かな海を輝く未来へ」のもと、基本方針に以下4つの柱を立て企画・運営を進めてきました。

- (1) 東日本大震災からの復興状況の発信
- (2) 豊かな自然環境の保全
- (3) 多様な漁業を中心とした水産業の発展と地域の活性化
- (4) 食材王国みやぎの発信

特に注力した点としては、世界三大漁場といわれる三陸沖漁場を背景とした豊穣な海への感謝、震災の悲しみから立ち上がり復興に邁進してきた県民の姿、全国・世界中から数えきれないほど寄せられた支援への感謝、そして輝きを取り戻しつつある宮城の海と明るい未来を次代に引き継ぐ決意、こうした想いや願いを伝える大会にしたいと考えてきました。

また、本大会では、豊かな自然環境の保全を「森と海の繋がり」や「脱プラスチック」で表現したいと意識してきました。林業関係の団体・企業の皆様の協力を得て、会場は多くの木製品や紙製品で彩られ、招待者の皆様に木の温もりを感じただけたことと思います。



県産材に仙台箪笥金物をあしらった司会者台



CLT製の報道取材台

6 開催までの歩み

(1) 作品コンクール

当初開催予定であった令和2年と、一年延期した令和3年の二か年に渡り作品を募集し、作文・絵画・習字の応募総数は2,879点を数えました。



宮城県知事賞受賞作品「たのしいうみ」
(絵画・小学校低学年の部)

(2) 豊かな海づくりキャラバン

大会の機運醸成に繋げることを目的に、海や魚に関連したイベントのほか、集客力の高いイベントと連携を図り、県内各地でキャラバン活動を全35回行いました。

(3) 大会記念リレー放流

県内の小中学校を対象に、海面ではホシガレイ、内水面ではヤマメなどの稚魚放流を全24回開催し、約8百名の児童・生徒が参加、約2万6千尾の稚魚を放流しました。



大会記念リレー放流の様子

(4) 魚食・食育普及活動

大会理念の水産資源保護や環境教育、家庭での魚食普及を目的に、各関係団体と連携し出前講座や料理教室などを全10回開催しました。

また、宮城県内レストランにおいて、毎月開催している「みやぎ水産の日」に、チラシやグッズを配布し、大会PRを行ってきました。



魚食普及活動の様子

(5) 大会開催記念イベント

大会のプレイベントとして、令和元年10月に『豊かな海づくりフェスタ2019』を、令和3年2月に『開催記念イベント』を、同じく6月に『100日前イベント』を開催しました。各イベントでは、多くの県民の皆様に「魚とのふれあい」や「ステージイベント」にご参加いただいたほか、ギネス世界記録に認定された「魚の折り紙のモザイクアート」や「大会イメージソング」の披露も行いました。



海づくりフェスタ
2019の様子



ギネス記録に認定された
「魚の折り紙モザイクアート」

(6) ブルーカーボンオフセットみやぎ

大会協賛金等を活用し、ブルーカーボンオフセットのモデル事業として、大会開催により発生した一定割合のCO₂を吸収（オフセット）するための藻場造成を行いました。

(7) 海洋プラスチックごみ対策

全国一斉海浜清掃旗揚げ式への参加のほか、「宮城海ごみなくし隊」などの地域のボランティア団体等と連携し、海浜清掃に参加してきました。



海浜清掃参加の様子

また、100日前イベントにおいても、「海洋プラスチックごみに関するシンポジウム」を開催しました。



全国一斉海浜清掃旗揚げ式



シンポジウムの様子

7 大会を終えて

(1) 大会記念放流稚魚等の放流

式典行事において参加者の皆様にご紹介した「大会記念放流稚魚等」は、紹介者の各氏と地元

小学生等で記念放流を行いました。それぞれマガキは石巻湾内に、ノリは松島湾内に、エゾアワビは志津川湾内に、イワナは八幡川（南三陸町）に放流されています。



大会記念放流稚魚等の放流の様子

(2) 大会理念の継承

今回の大会開催を一過性のものとせず、理念を次代に継承するため、子ども達による稚魚放流や森との繋がり、ブルーカーボンや脱プラスチックへの取組、海浜清掃ボランティアとの連携など、豊かな海づくり活動の継続・発展を推進します。

8 結びに

今回の大会は、前例のないコロナ禍における開催となり、関係者・招待者の皆様にはご不便・ご迷惑をおかけしたことと思います。

大会の慣例となっている歓迎レセプションや関連行事など、一部行事の中止も余儀なくされましたが、天皇皇后両陛下にオンラインで御臨席いただけたこと、規模縮小にはなりましたが全国から多くの皆様をお迎えして無事に開催できたことを、この上ない喜びと感じています。

震災から10年、宮城の海はかつての輝きを取り戻しつつあります。当たり前にある日常への感謝、豊饒な海への感謝、そして復興に際して寄せられたご支援への感謝を忘れることなく、今大会の「よみがえる 豊かな海を輝く未来へ」のテーマのように、宮城の将来像・本県水産業の明るい未来を描いてまいります。

末筆になりますが、大会開催に当たりご尽力をいただきました関係各方面の皆様、多大なご協賛・ご協力をいただきました各企業・団体の皆様に、改めて深く感謝を申し上げます。

天皇陛下のおことば

第40回全国豊かな海づくり大会に、オンラインという形で、皆さんと共に出席できることを大変うれしく思います。

四方を海に囲まれた我が国は、古くから豊かな海の恵みを享受してきました。また、山や森から河川や湖を経て海へ至る自然環境と、そこに育まれる生命や文化は、私たちに様々な恩恵をもたらしてくれます。この豊かな海の環境を保全するとともに、水産資源を適切に保護・管理し、海の恵みと海に関わる文化を次世代に引き継いでいくことは、私たちに課せられた大切な使命であります。

今回で40回を数える本大会が果たしてきたこのような役割と意義に思いを馳せ、大会に携わってこられた多くの関係者の努力を多といたします。

今大会の開催地宮城県は、沖合で親潮と黒潮が交わり、サンマやカツオ、マグロなどの海の幸に恵まれてきました。また、沿岸では、カキやノリ、ギンザケなどの養殖が盛んに行われ、全国有数の生産地となっています。

その宮城県では、今から10年前に東日本を襲った巨大地震とそれに伴う津波により、1万人以上の尊い命が失われました。また、多くの家屋やあらゆる産業基盤にも甚大な被害が発生しました。震災後、皇后と共に訪れた被災地の光景は、今も目に焼き付いて、私たちの脳裏を離れることはできません。この震災によって亡くなられた方々に対し、深く哀悼の意を表するとともに、被害に遭われた全ての方々に対し、改めて心よりお見舞いを申し上げます。

震災発生から今日まで、数多くの被災者が共に助け合い、また、国内外から多くの支援を受けながら、復興への歩みが進められてきました。その地において、震災を乗り越えて、初めて全国豊かな海づくり大会が開催されることは誠に意義深く、復興に向けた地域の人々のこれまでのたゆみない努力と関係者の尽力に深く敬意を表します。

現在、宮城県では、「環境と調和した持続可能で活力ある水産業の確立」を目指し、稚魚の育成や放流、藻場の造成など、水産資源の回復を図る取組が積極的に行われるとともに、海浜清掃や植林活動など、海の環境を保全する取組も進められていると聞き、心強く思っています。

本日表彰を受けられる方々を始め、全国各地において日頃から豊かな海づくりに尽力されている皆さんの活動が、今後も多くの人々によって支えられ、更に発展していくことを期待します。

私たちは、今もなお、新型コロナウイルス感染症の影響により、様々な困難に直面しています。水産業に携わる皆さんの御苦労もいかばかりかと思いますが、私たちが皆で心を一つにし、力を合わせてこの試練を乗り越えていくことを心から願います。

「よみがえる 豊かな海を 輝く未来へ」をテーマとするこの大会が、海や漁業への関心と理解を深め、豊かな海づくりを目指して更に多くの人々が協力していくための契機となることを願い、挨拶といたします。

大会決議

私たち日本人は古来より自然を尊び、海・川・森と共に存しながら生業を営んできた。そして、共存からもたらされる海の恵みは、人々の命をつなぎ、彩りある多様な魚食文化を育んできた。

とりわけここ宮城県は、世界三大漁場のひとつ金華山・三陸沖の漁場を有し、豊穣の海から良質な水産物を国民に提供する重要な役割を果たすとともに、未曾有の災害をも乗り越え、復興を果たしてきた。

私たち水産関係者は、被災地の方々とともに、環境を守り、水産資源の持続的な利用を通じて、

将来にわたって、豊かな海を子どもたちにつないでいく責務がある。

本年は、ここ宮城県において、「よみがえる豊かな海を 輝く未来へ」を合言葉に、東日本大震災から復興した姿を示すとともに、自然との共存を通じ、持続的な漁業の実現に努めていくことを、ここに決議する。

令和3年10月3日

第40回全国豊かな海づくり大会

宮城県 水産林政部 全国豊かな海づくり大会推進室

